

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明選

美しき真珠に値札冬に入る

宇陀市 泉尾 武則

△評▽数年にわたる養殖と工程を経てよりすぐられた真珠が、値札とともに店頭飾られる。初冬の寒気が、真珠の輝きをつむ。

きしきしと地球のきしみ十二月

鎌倉市 小川 求

△評▽宇宙に浮く美しい地球も、さまざま課題を抱え、年末を迎えてきしみの音を立てている。宅配の息荒くして師走かな

石路の花親王の墓照らしをり

東京 伊藤 公一

久留米市 持地 恒美
みほとけの掌に片々と冬さくら

富士市 後藤 秋臣

思春期の子と話しつつ日向ぼこ

湖西市 宮司 孝男

冬の旅夏目雅子の待つ黄泉へ

紀の川市 中島 走吟

枝打ちにラジオを鳴らす親子かな

神奈川 新井たか志

初雪や茂吉の山は凜として

高松市 島田 章平

ヘリコプター発ちて枯野を残しけり

平塚市 高橋 佳代

片山由美子選

石路咲いて父の帰らぬ庭となり

日高市 秋葉ふじ子

△評▽父が亡くなったのは秋か、あるいは夏か。季節が変わり、改めて不在を実感したのだろう。草花を愛していた父に違いない。形なき影に躰く寒夜かな

掃き終へしちの落葉は手で拾ひ

東京 石橋万喜子

△評▽何にともなくつまずくのは年をとるとよくあること。形なき影が不気味で寒々しい。

軒下に光りて揺れる柿すだれ

和泉市 樋谷 充子

湯気立や駅員ひとり客ひとり

志木市 谷村 康志

十二月八日の海を見つめをり

平塚市 正好 浩

一列で自転車登校空つ風

平塚市 日下 光代

ポケットに職場でもらってきた蜜柑

国立市 佐藤 建

義経の襟元正す菊師かな

柏市 高橋 壽子

職退きし妻の小言や冬に入る

山梨市 浅川 青磁

小川 軽舟選

図書館の新聞へたる小春かな

津市 渡邊 健治

△評▽小春日和の図書館に来て新聞をじっくり読む。同じような生活パターンの人の多いことが新聞のへたり具合でわかる。

チェロ響く大学祭や銀杏散る

長崎市 音 超子

△評▽どこかの教室でコンサートがあるらしい。イチョウを散らして大学祭らしくなった。

街ゆくはみな影法師秋の暮

甲府市 村田 一広

行く秋や国旗に社旗に風荒ぶ

流山市 小林 紀彦

綱の樹に鶴の声鋭き朝かな

龍ヶ崎市 白取 せち

立冬や車体の光る駐車場

狭山市 小俣 友里

図書館に流るる葉や冬に入る

藤沢市 武 正義

クレーンをクレーン吊りて秋高し

御殿場市 廣岡 綾子

寒立馬古武士のごとき佇い

京都市 観山 哲州

ひとりの居てのり弁を食ふ秋の暮

仙台市 古谷 隆男

西村 和子選

すれ違ふ白杖今朝は冬コート

宋栗市 宗平 圭司

△評▽助詞の「は」が、毎朝見かける人であることを語っている。季節により、厳しい季節を迎えた自他の覚悟が伝わる。

降りさうで降らぬ北山冬近し

伊勢市 古野 政木

△評▽冬が近づくと、京都の北山はいつも雲をかぶっている。降れば北山時雨となるのだが。山茶花や母のことばに漢語なし

大人皆笑つてをりぬ泣き相撲

東京 望月 清彦

日曜もバスは定刻石路の花

米子市 永田富基子

河馬と撮る集合写真冬冬ぬくし

津市 渡邊 健治

冬麗の薄衣纏う観世音

大阪 芹澤 由美

川添ひのおでん屋台へ襟を立て

山梨市 的場けさみ

殉教の像に留まる冬日かな

横浜市 相沢恵美子

神戶市 橋口 正子

高田正子

柚子湯に思うこと



出会いの

ようやくインフルエンザのワクチンを打ちに行った。新型コロナウイルスはもう嫌だが、こちらはと思ったのだ。打った安心感が満足していたら、翌日二の腕全体がはれ上がって驚いた。まあ、よく効いたということにしておこう。こういふときには温まるに限ると、冬至を待たず、夜な夜な柚子を風呂に持ち込んでみる。

・ 柚子湯してあしたのあしたおもふかな
・ 生涯の女書生や柚子湯して
・ 柚子湯してあしたのことは考へず

黒田杏子

どれも今年3月に急逝したわが師の句である。順に1977年、88年、2019年の作。これまでは「あした」一つなりで1句目と3句目を話題にすることが多かったが、最近原稿を書きながら2句目について考えることがあった。

2句目は「木一草」という制作年の記載の無い句集に載るが、その後88年12月15日の「山口青邨先生長逝」を悼む△寒牡丹大往生のあしたかな▽がある。「女書生」の句を詠んだときには、既に師の死を覚悟していたことだろう。書生とは先生があつてこそのもだから、この句にも明らかに青邨がいる。明々と詠みあげられた「寒牡丹」の句に気を取られていたが、「女書生」の句は、青邨を生涯の師と仰ぎます、と誓うことには違いない。柚子を握りしめながら、逝こうとする師を思う姿が見えた気がした。

それにしても今年、われながらよく働いた。あとは風邪をひかずに年を越さねば、と今夜も柚子を採りに庭へ出る。(たかだ・まさこ「俳人」)